

KAIKA 東京 by THE SHARE HOTELS アートのご案内

2020年7月15日（水）、東京 浅草からほど近い墨田区本所に「アートストレージ」（収蔵庫）とホテルが融合したコンテンポラリーアートの新しい拠点「KAIKA 東京 by THE SHARE HOTELS」がオープンします。

日本を代表する計6つのアートギャラリー*が公開保管スペースとして利用するのに加え、オープンと同時に、館内共用部に、アートアワード<KAIKA TOKYO AWARD>（企画・運営：株式会社ノエチカ）の受賞作品を収蔵・展示するとともに、企画展 も開催します。

*6のアートギャラリー：CLEAR GALLERY TOKYO、KOSAKU KANECHIKA、NANZUKA、Yoshimi Arts、VOILLD、YUMIKO CHIBA ASSOCIATES

<KAIKA TOKYO AWARD>の募集期間だった2020年1月20日～2月21日には、全国から、絵画、陶芸、彫刻など235点の作品の応募があり、応募作品の中から受賞作品を選定しました。選ばれた作品は、オープンから2022年3月末日までホテル内に展示されます。

また、ホテルのオープンを記念し、<KAIKA TOKYO AWARD>で審査員を務めた館鼻氏による企画展“館鼻則孝「FORM AND COLOR」”を、7月15日から8月16日までの間、1階の「STORAGE 1」で開催します。

オープン記念企画展 館鼻則孝「FORM AND COLOR」



Heel-less Shoes 2019
©NORITAKA TATEHANA K.K., Courtesy of KOSAKU KANECHIKA

オープン記念企画展開催概要

タイトル “館鼻則孝「FORM AND COLOR」”

会場 KAIKA 東京by THE SHARE HOTELS | 東京都墨田区本所2-16-5

期間 2020年7月15日（水）-8月16日(日) 8:00-20:00

入場料 無料

主催 KAIKA 東京

協力 KOSAKU KANECHIKA



Descending Painting Series 2019
©NORITAKA TATEHANA K.K., Courtesy of KOSAKU KANECHIKA



Floating World Series (blue thunder, light blue cloud) 2019
©NORITAKA TATEHANA K.K., Courtesy of KOSAKU KANECHIKA



KAIKA 東京 by THE SHARE HOTELS アートのご案内

KAIKA TOKYO AWARD 受賞作品の設置のご案内

<KAIKA TOKYO AWARD>について

「KAIKA 東京 by THE SHARE HOTELS」の施設のコンセプトである「アートストレージ」（収蔵庫）を形作る取り組みの一環として、館内共用部に収蔵・展示するアート作品を公募する<KAIKA TOKYO AWARD>（企画・運営：株式会社ノエチカ）を、開催しました。審査員は、美術評論家で東京藝術大学大学美術館長・教授の秋元雄史氏、アーティストの館鼻則孝氏がつとめました。2020年1月20日～2月21日の募集期間で、全国から絵画、陶芸、彫刻など235点の作品の応募がありました。受賞作品・入選作品は、2022年3月末日まで、約2年間の収蔵・展示を予定しております。これらの作品は、アート・コミュニティプラットフォーム「ArtSticker」にも掲載されます。オンライン上でも鑑賞することができ、ご覧になった方の感想もご覧いただけます。

ArtSticker

アーティストを直接支援することで新たなお金の流れを生み出し、アートをよりひらかれたものを目指すプラットフォーム。著名アーティストから注目の若手アーティストまで、多彩なジャンルの作品を収録しています。

- ・ ArtSticker ダウンロードサイト <https://artsticker.app/r/dl>
- ・ KAIKA TOKYO AWARD ページ <https://artsticker.app/share/events/detail/153>

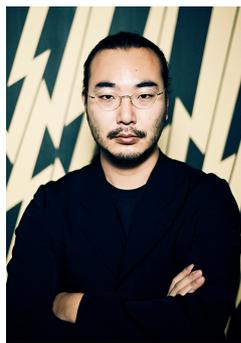
<KAIKA TOKYO AWARD>審査員



秋元 雄史 | Yuji Akimoto

キュレーター、美術評論家。
1955年東京生まれ。
東京藝術大学大学美術館長・教授、
および練馬区立美術館館長。

©Chisato Hikita



館鼻 則孝 | Noritaka Tatehana

アーティスト。
1985年東京生まれ。
歌舞伎町で銭湯「歌舞伎湯」を
営む家系に生まれ鎌倉で育つ。
レディー・ガガの履くヒールレス
シューズの作者として知られ
る。東京藝術大学卒業。

<KAIKA TOKYO AWARD>受賞作品・入選作品

厳正なる審査の結果、下記作品がそれぞれ選出され、2022年3月末日まで、約2年間、収蔵・展示される予定です。

アワード	作家名・作品名（敬称略）
KAIKA TOKYO AWARD 大賞	新藤 杏子「drawing of one day」
秋元 雄史 賞	梶浦 聖子「色を聴くウサギ」
館鼻 則孝 賞	加藤 智大「iron-oxide painting “W.S./T****68”」
入選（作家名50音順）	諫山 元貴「Objects #4」、井上 瑞貴「Night drive(2)」、内田 涼「by whom」、 荻原 賢樹「無題（工場で働く人）」、クニト「落ちてきた小さき部屋」、 近藤 尚「Instrumental Furniture」、DAIGO「雪」、高木 基栄「硝像 -精神分析-」、 都築 崇広「汚れの絵画/集積地」、中北 紘子「PETALS」、 柳 早苗「ソレイユ Au fil du temps / ときを縫う」、山本 恵海「器」、吉田 一民「岩場の男」

参考情報：受賞作品について 審査員コメント

KAIKA TOKYO AWARD 大賞

作品名：drawing of one day

作家名：新藤 杏子

素材：アルシュ紙に水彩・アクリル・インク

サイズ：H273×W22×D3mm (100pieces)



<秋元 雄史 氏 コメント>

新藤杏子は一貫して人々の営みを描いてきた。水分を含んだ顔料で、筆速をいかして描いているため、一見、軽めのドローイングに見えるが、人々の社会的な背景や暮らしぶりを想像させる、しっかりした作品である。ドローイングに描かれた人々は、新藤と関わりのあった人々である。新藤が入院した時に病院で出会った。多くは患者さんであろうか。病気の種類や症状はこのドローイングからは想像できないが、病室から検査に向かうときや何気なく病室で過ごす合間に出会った人たちだ。新藤との関わりの度合いはさておき、描かれた人々の佇まいからは、病院暮らしの中での日常的な表情が伺われる。人の暮らしぶりというのは、どこにでもあり、またそれが最も守るべきものかもしれない。日常のありがたみといえばそれまでであるが、当たり前だが、そんなことを想像させる絵だ。日記風というか、スケッチ風というか、かるいタッチなのだが、人々の姿や表情がうまく捉えられていて、つい見入ってしまう。

秋元 雄史 賞

作品名：色を聴くウサギ

作家名：梶浦 聖子

素材：フェイクファー、パンヤ、フェルト、毛糸

サイズ：H4120×W800×D880mm



<秋元 雄史 氏 コメント>

愛くるしい、白いうさぎである。両耳がピンと立ち、手足が長い。まるで着ぐるみのように、キャラクター化している。これがそのままひとが入る着ぐるみサイズであれば、まだ想像の範囲だろう（それでも冷静になって考えると人が入った着ぐるみでも唐突に現れれば、けっこうこわい）。しかし、まあ、それでも許容し、よしとするとして、あらためて梶浦のうさぎを見る。大きい。4mである。ここまでくると異様である。表情の愛くるしさとの大きさ対比が、この作品のポイントであろう。大きさは時に非日常感をつくりだす。梶浦は、よくキャラクター化された動物をつくる。物語から抜け出てきたような、どこかファンタジックな生き物たちである。そこらが紡ぐ物語が梶浦の作品世界である。梶浦が大切にしているもの。もともとは扱いのむずかしい金属を扱う作家であるからか、制作プロセスには神経を使っているように見える。作品から透けて見える造形感がしっかりしている。

館鼻 則孝 賞

作品名：iron-oxide painting “W.S./T****68”

作家名：加藤 智大

素材：酸化鉄、アクリル絵具、キャンバス、木枠

サイズ：H1620×W1300×D50mm



<館鼻 則孝 氏 コメント>

加藤智大氏の描く肖像画は、強調された物質感によって描かれた人物の実在感を際立たせ鑑賞者を引き込む。しかしながら、描かれた人物は作者とは全く面識のないインターネット上で散見されるマグショットと呼ばれる逮捕者の人物写真だ。「実在する見知らぬ他人を描く」という作者と対象との距離感によって、美術史の上で永年描かれ続けてきた、肖像画という様式の現代のかたちが表されたことには作者の独自性を感じる。インターネット上で誰もが見ることのできる人物写真を加工し、取って抽象化させることで単なる物質的な要素に置き換えたことが、作者独自のメディウムとも言える酸化鉄での表現に結びついているのかもしれない。完成された作品は、工芸的とも言える程の高いクオリティと共に、今までの絵画表現には無いような質量を伴う立体表現を成立させている。